

# 人権なら

2024年2月1日

第158号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## 奈良の解放運動を聞き取り

### 石元清英さんが山下力さんへの作業を続行

山下力さんへの「聞き取り」作業を一昨年から進めてきた＝写真。作業は一通り進んでいる。聞き手の石元清英さん(元関西大学教授)は、さらに切り込んで聞きたいとの思いを強く持たれている。そのため、もう少し聞き取り作業を続けることとなった。



そこで、「差別事象」「糾弾」「運動の分裂」の3項目にわたる追加の聞き取りを1月9日に実施した。

### 新しいスタイル、運動は始まっているのか

「糾弾」の項目では、「資格立場の絶対化や差別被差別の固定化」などから自由にならなければいけない。人と人との関係を変えるためには、我々からではなく、私から始まる運動や取り組みが重要。そんな覚悟が一人ひとりに求められている。異議申し立て、差別への不同意と抵抗。それを通じての対話(コミュニケーション)が求められていると、山下さんは語ってきた。

では、こうした「新しいスタイル、運動は始まっているのでしょうか」などと質問。話が展開した。

### 「部落差別の怖さ」と衝撃を父親に与えた事件

「差別事象」の項目では、最近の差別事象っていうのは、どう変化してきたのでしょうかと質問。

山下さんはまず、「硫酸事件」(1954年に結婚差別に起因して起きた)を取り上げた。小学6年を終了し、中学受験のころ、父親から「親の仕事を隠せ」「友達をつくるな」「一生懸命勉強をして一日も早くこのムラから出て行け」と、何の前触れもなく説教された。その背

景には、この事件があった。それほど「部落差別の怖さ」と、衝撃を父親に与えた事件だったと語った。

### 1993年の分裂と、それ以降の過程を質問

「運動の分裂」の項目では、1993年の「分裂」と、それ以降の過程(部落解放同盟の解散と、NPOなら人権情報センターへの移行)について、質問が続いた。

今回は2月初旬に「戦後奈良の解放運動」「山下さんと解放運動」をテーマに聞き取ることとなる。

この聞き取り作業は「部落解放運動史」編纂事業に先行して進めてきた。区切りが付いた段階で、「聞き取りを終えて」をテーマに学習会を開くことになる。

\*\*\*\*\*

## 確定申告相談会のお知らせ

奈良県中小企業者協会は2月27日から3月8日まで2023年分確定申告相談会を開く。自動車保険など、各種保険(共済)の相談も行う。いずれも午前は9時20分から、午後は1時20分から、三宅町あざさ苑で。

月日	曜	対象郡市町
2月27日	火	川西町、三宅町
28日	水	田原本町
29日	木	
3月1日	金	
4日	月	田原本町、奈良市、桜井市、天理市
5日	火	天理市
6日	水	天理市、大和高田市、御所市、葛城市、香芝市、宇陀市、北葛城郡
7日	木	生駒市・生駒郡、大和郡山市、五條市
8日	金	橿原市、他府県

## 回復者招き架け橋交流講演会

### 榎本初子さんが講演「母の詩がくれたもの」

第3回架け橋交流・講演会が1月20日、桜井市立図書館であった＝写真。

架け橋 長島・奈良を結ぶ会と桜井市教職員組合が共催。NPOなら人権情報センターほか、多くの機関、団体が後援した。



記念講演は邑久光明園に入所している榎本初子さん(写真)が「母の詩がくれたもの」と題して行った。

榎本さんは12歳のとき、岡山県長島の邑久光明園に入所。結婚を機に社会復帰し、大阪で仕事に就く。だが、ハンセン病回復者を隠した苦しさを抱えながら生活。病気再発で再入所。今も光明園で生活する。

1995年5月に東京在住の叔父という人から電話があった。榎本さんには産みの母がいて、「私が3歳のときハンセン病を発病。群馬の栗生楽泉園に入った。目も手足も不自由で現在も生活している」と聞かされ、驚いた。



### 栗生楽泉園に入所の母と再会も翌年死去

叔父が榎本さんを捜すきっかけは新聞に載った榎本さんの妹の短歌だった。その後、母(香山末子さん)を知る人が群馬から訪ねて来て、母の詩集『青いめがね』を渡された。「末子さんに会ってほしい」と涙を流し、立ち去った。やっとの思いで母に電話を掛けた。

そのときの母の声は「闇の底から絞り出すような声」だった。母は「いま頃は子や孫に囲まれているとばかり思って…。それを支えに今日まで生きてきた」と。

母に会う決心を固めたのは、光明園図書室の片隅にあった母の「詩集」に収められていた詩「夢の中の子供」に自分の名前があるのを見つけたときだった。そして、9月4日、栗生楽泉園を夫と訪れた。

母は1941年、韓国から先に渡日していた父を頼って渡日。翌年、私を出産。2年後に長男出産と同時に

発病する。3歳の私を残し、生まれたばかりの長男を背負い、楽泉園に入所した。母と再会した翌年の3月、母は体調を崩し、5月に死去した。

榎本さんの話を聴き、香山末子詩集『エプロンの歌』と出会った衝撃を思い出し、身体がこわばった。

### 「家族から離され療養所暮らし」を想像してと

午後は3つの分散・交流会。パネラーは「ハンセン病関西退所者原告団いちょうの会」の福山としおさんと、本山美恵子さん(仮名)、榎本初子さん、邑久光明園学芸員の太田由香利さんらが語り合った。

第1分散会では、回復者支援センターの加藤めぐみさんが福山さんに聞く形で進行。福山さんは最後に「小学生のとき、ハンセン病を発症したと想像してみてください。両親や家族、友だちから引き離され、学校も行けなくなり、一人療養所で暮らすことになる。どうでしょう」と問い掛けた。参加者は胸を強く打たれた。

\*\*\*\*\*

## 旧大柳生牧場で焼き芋大会

### 梅谷尚司さんの還暦を祝い介護・支援者が集う

梅谷尚司さんが還暦を迎えたのを祝い、昨年11月26日、旧大柳生牧場の中庭で焼き芋大会があった。尚司さんの介護者、生活支援者、職員、梅谷親子を支援してきた仲間が集まった＝写真。



1979年、養護学校義務化に反対し、地域の中学校への就学を求めて闘い、富雄中学への入学を勝ち取った。この就学闘争は「東の金井、西の梅谷」と呼ばれ、全国的なうねりとなり、全国の障害者、家族に大きな勇気を与えた。

国連の障害者権利委員会は昨年、日本の特別支援教育は「他の子どもと分離させるシステム」だと批判。日本政府にインクルーシブ教育の推進を勧告した。

今年は養護学校義務化から45年。「誰一人、取り残さない地域社会、学校」を作り出す決意を固めた。

## 回復者がハンセン病問題で講演

### 式下中学が人権学習の一環として取り組む

川西町・三宅町組合立の式下中学校は1月12日、ハンセン病問題の講演会を催した。式下中は人権学習の一環として「ハンセン病問題」に取り組む。昨年度は16時間、今年度は14時間に及んだ。



講演は2年生を対象に実施。ハンセン病回復者の団体「いちょうの会」の岡山郁夫さん(仮名)と、大阪府回復者支援センターの加藤めぐみさんが話をした。

### 岡山郁夫さんが療養所などでの体験を語る

岡山さんは小学5年のとき、国立ハンセン病療養所岡山愛生園に入所。園内の新良田高校を卒業後に退所した。プロトミンという特効薬ができ、回復した。

入所するときは、そのまま置いて行かれるとは思わず、母親は知らない間に一人で帰ってしまった。幼心にショックを受け、泣き続けた。園の生活に慣れ、友達もできた。高校では野球部に入り、全国5か所の療養所を慰問に回り、歓迎された、と思い出を語った。

退所して実家に戻るが、近所の人たちとは顔を合わせないように暮らさねばならなかった。何とか就職し、同僚の女性と結婚しようとなった。だが、私がハンセン病だったことを女性の家族が知り、破談した。

その後、回復者の女性と結婚し、2人の子どもに恵まれた。しかし、子どもには回復者であることを話せていない。同じ苦しみを味合わせたくないからだ。

望むのは「私はハンセン病回復者だと当たり前に話ができる、そんな社会になってほしいこと」だと。

### 「ハンセン病問題に何を学ぶか」と加藤さん

加藤さんは、ハンセン病問題の歴史として、明治時代、欧米に追い付くために放浪しているハンセン病患者は、「国の恥」としてすべて収容するという国の政策

があった。その収容所の1つに外島保養院があった。1934年の室戸台風による被害で外島保養院は197人の死者を出し、建物は壊滅した。

再建計画があったが、建設予定地では、その都度、反対運動が起こり、再建されることはなかった。

「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の第1条は「この法律は国によるハンセン病患者に対する隔離政策に起因して生じた問題であって、ハンセン病患者及びその家族の福祉の増進・名誉の回復に関し現在もなお存在するもの」と銘記する。

「ハンセン病問題に何を学ぶか」を考えてほしい。各自ができることは①学び伝えること②目の前の差別に対しどう行動できるのか③非常時のとき、流言やデマに対してどう見極められるのかだ、と提起した。



## 「人権学習を創る」と公開授業

### 地域教材を出発点に自己の差別意識に気づく

式下中学校は1月22日、「地域教材を出発点とした人権学習を創る」を研究テーマに公開授業を行った。

公開授業は2年生4クラスで同時に行われた。参観者はすべてのクラスを見学して回った。

授業では、新型コロナウイルスが流行したとき、隔離や罹患した人への偏見などがみられた。ハンセン病のときと同様の問題が繰り返されたのか。それらの判断が正しかったのかを考えてみたい。何も知らないこと、知っていても周りの意見に流されてしまうことが差別に負担することにつながるのだ、と学んだ。

「人権学習を創る」目標は①郷土にゆかりのある忍性さんと出会う②ハンセン病について正しく理解し、どのような歴史があるのか事実を知る③ハンセン病問題を通して、差別問題が現代も残る問題であることを知り、自分の中の差別意識に気づくことにある。



## 公教育はどうあるべきか

### 久保敬さんが私立高校の授業料無償化で講演

「公教育はどうあるべきか」をテーマにした講演会が1月21日、三宅町のあざさ苑であった＝写真。講師は久保敬さん。久保さんは大阪市立木川南小学校の前校長。2021年5月、市の教育政策を批判する「提言書」を松井一郎・市長に提出。波紋を呼んだ。久保さんは文書訓告の処分を受けた。



講演会は松本健、森内哲也、渡辺哲久の3人の三宅町議と、塩見牧子・生駒市議が企画した。きっかけは、山下真・知事が昨年10月、私立高校の授業料を無償化する方針を打ち出したことにある。

### 公立高校の廃止、教育の民営化が進行

先行する大阪府では、公立学校が26校も廃止になっている。今後も10校が廃校になる。「公立高校の廃止」「教育の民営化」が進行しているのだ。

2013年の「府立学校条例」により、「定員割れ3年

#### 編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「大川原化工機」事件に賠償を認める判決が昨年末に出た。事件は冤罪だった。検察内部から告発があり、警部補も法廷で「捏造」と証言した。それ程、無茶な捜査だった。事件は手柄を立てての出世欲と、公安組織の権威誇示のために、でっち上げられたのだ。実際、担当者は栄転した。警察、検察の担当者や、癌に苦しむ被告を保釈せずに長期拘束を認めた裁判官は許せない。連中こそ犯罪者だ。人権蹂躪極まりない事件なのに、誰一人として反省の言もなく、責任も取らない。しかも控訴までした。連中を処罰し、賠償金を払わせるべきだ。でないと、冤罪事件は今後も起きる。

連続の学校は統廃合の対象」とした。翌年には「学区制」を撤廃。以降、10年で17校もなくなった。

不人気な学校から潰していくという考え方では、しんどい子どもの受け皿になっている学校から対象となる。さらに、私立高は入学金も制服も公立高より高価なのがほとんど。無償化されても経済的に厳しい家庭は私立の選択が難しい。

### 教育への政治介入を許してきた自分に怒り

久保さんは、「提言書」を書いたのは自分への怒りからだという。教育への政治的介入を許し、教育の独立性が損なわれてきたことへの憤りで、それを見過ごしてきた自分への怒りだった。

安倍政権下の2006年の教育基本法改悪で、国や地方公共団体の介入を許すことになった。おかしいと感じつつも批判することなく、思考停止し、「競争主義」社会に子どもを放り込んでいった自分は、戦前の教員と同じではないかと。

大阪「教育振興基本計画」に掲げられた数値目標を達成することが教師の仕事となり、学校が教育行政の「末端機関」になるのではなく、本来は子ども一人ひとりの人としての成長に直接関わるこそが教師の仕事であり、責任であると。

### 保護者・地域、教職員との対話で信頼と連帯を

「大人が楽しくなければ、子どもも楽しい訳がない。大人が自由でなければ、子どもも自由にはなれない」。子ども、保護者・地域、教職員との「対話」による信頼と連帯、そして共有財産(コモン)としての公教育を取り戻す闘いに立ち上がろうと呼びかけた。

#### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター  
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/